

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	岡田 悠汰
論文題目	隠れ-なさと有限性 — ハイデガーにおける「真性」と「われわれ」の問題		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、二〇世紀ドイツの哲学者であるM. ハイデガーの前・中期思想 (具体的には一九二〇年代後半から三〇年代後半にかけてのそれ) の変遷と、その推移に終始伏在していると考えられるところの彼の思索の根本問題を闡明せんとするものである。申請者によれば、この根本問題は二つある。(一)「真性」(すなわち哲学史に所謂「真理」をしてまさにそれとして成立せしめる当のもの)における「隠れ-なさ」と「隠れ」との対立的統一、及び(二)「われわれ」の「有限性」がそれである。</p> <p>本論文の概要をなすのは八つの章である。第一章は、ハイデガーの前期哲学の代表作たる『存在と時間』における「実存の真性」を巡る議論を批判的に再検討する試みである。周知のように同書では、真性と非真性はそれぞれ、現存在の開示性と頹落として捉えられると共に、双方は共に等しく根源的であることが主張される。しかるに同書はまた、現存在の先駆的覚悟性こそが最も根源的な実存の真性に他ならぬ旨をも説く。だがそうすると、真性と非真性の等根源性と先駆的覚悟性の最深の根源性はいかなる関係の中にあるのか。この問題の究明を通して、申請者は『存在と時間』の議論に潜む問題点を指摘するに至る。すなわちそれは、同書が現存在の存在構造の契機の一つである頹落を先駆的覚悟性の概念から導き出すことに成功しているとは言い難いことである。</p> <p>申請者の見るところ、かかる難点は『存在と時間』における現存在の「企投」の側面の偏重に由来するものであり、そしてそれは同書、及びこれに後続する講義録における「時間性」の分析にも波及している。その証左として第二章ではまず、時間性を構成する三つの脱自態の中の一つである「現在」(そして更には、その根幹にあるものとして位置づけられている「プレゼンツ」)が、元来は現存在の実存の二様態——つまり本来性と非本来性——の区別に先立つものとして導入されているにも拘らず、他方においては屢々、恰も非本来性の誘因であるかの如く捉えられていることが示される。そしてこれに続いて同章は、『存在と時間』以後のハイデガーによる「メタ存在論」をめぐる一連の議論の狙いが、それ迄は前述の企投概念の後景に退いていた嫌いがある現存在の「被投性」の主題化に存する所以を詳らかにしている。</p> <p>企投から被投性へ——メタ存在論における如上の照準の転換は単なる一時的な出来事に留まるものではなく、その後のハイデガーの思索が「実存の真性」に代えて「存在の真性」を究明すべく、(広義の)超越論的哲学の立場を離れて存在史的思索のそれに転じたことの前触れであると申請者は主張する。ハイデガーの「超越」概念の変遷と論文「真性</p>			

の本質について」の成立過程を丹念に追跡する第三章は、如上の解釈を立証する試みであり、また第四章は、こうしたハイデガーの思想の変貌の真相を別の観点から——すなわちプラトンのイデア論に関するハイデガーの解釈の変化に即して——別袂せんとするものである。

第五章では、論文「芸術作品の根源」の詳論を通して、存在の真性を巡るハイデガーの思索の特質を浮き彫りにすることが試みられる。その際に申請者が主に取り組むのは、存在の真性が芸術作品に即して生起するとハイデガーが考える理由は何かという問いである。これに対しては、存在の真性における不覆蔵性と覆蔵性の相依相属的な対立は、芸術作品に体現されるその独自の有り様（つまりハイデガーの所謂「世界と大地の闘争」）においてこそ持続的に現出しうるからであるという答えが与えられる。

第六章は「芸術作品の根源」や同時期の講義録を参照しつつ、芸術作品に顕現する存在の真性と現存在たる「われわれ」との関わり合いの内実を論ずるものである。そして第七章では、この両者の関係が「存在史的思索」の枠組みの中に置き直され、「性起としての存在」と「将来的な者たち」のそれとして捉え返されることが、遺稿『哲学への寄与論稿』の解読を通して示される。

最後に終章では、以上の考察を踏まえつつ、ハイデガーの技術論の現代的意義、及び近年耳目を集めている「間文化哲学」にハイデガー哲学を応用する可能性が論じられる。

(論文審査の結果の要旨)

二〇世紀を代表する哲学者の一人、M. ハイデガーの思想を巡る研究は、当人の没後半世紀弱を経た今日も尚、国の内外を問わず、活況を呈している。しかるに、かかる文運隆盛はその反面において、斯学の専門的細分化にも拍車を掛けている。かくて「木を見て森を見ず」とでも称せらるべき本末転倒の風潮の故に、昨今のハイデガー研究においては、『存在と時間』の刊行以降のハイデガー思想の劇的な変化の要因と機序の究明という根本問題は遺憾にも閑却されがちである。本論文は正にこの古くて新しい難題に果敢に挑む試みである。

本論文の独自性として先ず指摘に値するのは、如上の根本問題を巡る申請者の考究が立証を一步一步積み重ねていく正攻法によるものでありながらも、そこには同時に又、申請者ならではなしえぬような創意も認められる点である。その類稀なる工夫とは、本論文の副題に示されている「真性(Wahrheit)」と「われわれ」という視点の設定である。そしてかかる観点から見直すことによって、『存在と時間』公刊後のハイデガーの思索の変貌は実のところ、(同書では果たされなかった)不覆蔵性と覆蔵性の等根源性の確立を目指す「真性」概念の新訂と、かく改竄された真性との関わりにおいて、前述の等根源性を護持すべき者として自らを捉え返さんとする「われわれ」現存在の自己理解の刷新が齎したものに他ならぬ旨を申請者は説くのである。このように上述の視点を導入することによって、<『存在と時間』に代表される前期ハイデガー思想と爾後の中期のそれとの決定的な相違は、不覆蔵性と覆蔵性の等根源性なる論点の軽重にあり>という意義に富む創見を本論文が提出しえたことは、高く評価せられるべきである。

本論文の二つ目の特長は、今述べた主張をハイデガーの一次文献に基づいて論拠づける際に、申請者が近来公刊された新資料を逸早く巧みに活用している点である。就中、ハイデガーの思索の前期と中期を劃する重要な論攷「真理の本質について」と「芸術作品の根源」を論ずる第三章と第五章では、それぞれの論攷をその原形となった講演原稿の諸異稿にまで遡って検討し直す詳密な文献学的考証が、申請者の解釈の説得力をして富ましむることに大いに寄与していると言ってよい。

第三に本論文が称揚せらるべき点は、論点の首尾一貫性である。その好個の例は蓋し、第三章から第五章にかけての三章であろう。すなわち第三章において申請者は、中期ハイデガー思想において登場した新たなる「真性」論の核心を「密令(Geheimnis)」(全体における存在者の不覆蔵性と一体的に生ずる当該の存在者の覆蔵性)の概念の中に見出す。続いて第四章では、同時期にハイデガーが行ったプラトン批判の要諦が、(先行研究によって夙に指摘されている如く)イデア論による不覆蔵性の次

元の遮蔽にあるのみならず、当の不覆蔵性と表裏一体であるところの覆蔵性（或いは密令）の等閑視にも — 否、却って寧ろこの後者の看過こそ — 存する所以が詳らかにされる。その上で第五章は、かく不当にも閑却せられた密令の復権の要として、「世界と大地の闘争」（不覆蔵性と覆蔵性の対立的統一）の場たる芸術作品を枢軸に据えた「真性」論が成立するに至る理路を詳解する。本論文はかくの如く、大部の全篇を貫道しつつ、行論の総体を主導している議論の焦点を以てして、その特色となしている。

他方において、本論文には可惜未解決の儘に終わっている問題もまた残されているように思われる。例えば、論題にも掲げられている「有限性」の概念を巡るハイデガーの思索（殊に「存在の有限性」に関するそれ）の究明や、鍵概念の一つである「全体における存在者」なる術語に秘められた真意の考究等の作業は、もしそれらが果たされていたならば、本論文の論述全体を更に一層補強しえたであろうことは想像に難くない。

しかしながら、これは素より望蜀の嘆であろう。本論文の先述の美点が、かかる不備を補って余りあるものであることは、当該論文の調査委員一同の間で意見の一致を見たところである。申請者の労を多としたい。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和六年一月二十九日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては期限を定めず、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降